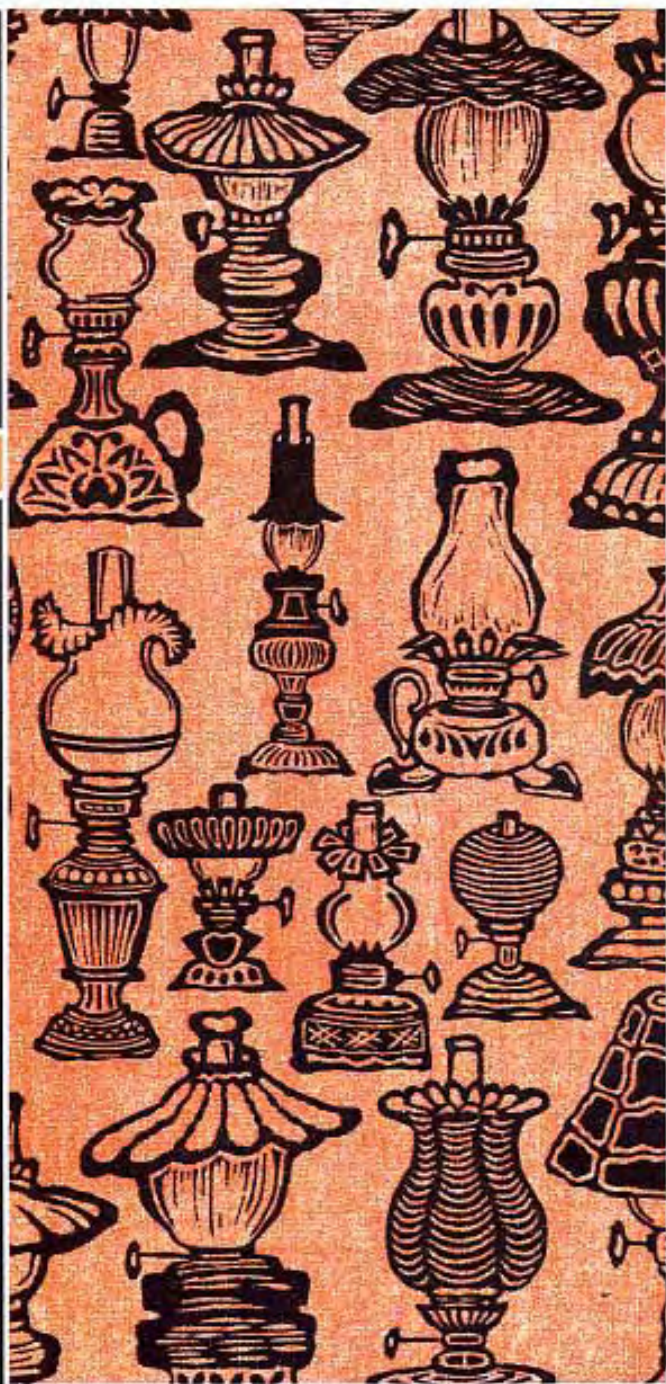


春燈

1

月号

JANUARY 2007



成瀬櫻桃子の句

だしぬけに日のさしてきし焼野かな

自註現代俳句シリーズ『成瀬櫻桃子集』昭和五十二年

以前、俳人協会の講座で「寒翁が馬」を副題に、自分の人生をも顧みて話されたことがある。人生は何が起きるか予測できない。喜びも悲しみもだしぬけにやって来ては、去ってゆく。掲句は喜びの瞬間である。戦後の暗く苦しい時代に「だしぬけ」の日差しは大きな喜びであり、前途に一筋の明かりが見えたのであろう。一年後〈芽木の雨まづしき家に子が生る〉長男誕生とある。

三 上 程 子

成瀬櫻桃子の句

阿波に多き狸の咄十夜粥

句集『風色』昭和四十八年

私がまだ春燈に入会する前、櫻桃子先生のご講演を拝聴した。その折、師は社寺への吟行句について、近頃の俳人は神仏を客観視するだけで、祈りの心がこもっていないと嘆かれたことに深い感銘を覚えた。この句、十夜という浄土宗の大切な法要に阿波の狸なるユーモラスな題材を配し、絶妙の俳味を醸し出している。因みに阿波は私の故郷であり、特に親しみを感じる句である。

白 杵 游 児

西ヶ原日記 (二六)

鈴木榮子

上野より台地のつづき冬来る

田端文士村初時雨とてさめざめと

田端東口駅舎も家も冬ざるる

赤紙仁王紙より願ひ重からむ

肝胆相照らす文士ら爛を熱うせよ
秋彼岸墓を身近に移さむか
そぞろ寒夜ごとポストに六〇〇歩
霜降や台北へ発つパスポート
昼よりも夜の鯛雲大漁型
足許より鳥翔つやうに秋西下（関西句会）
万年筆書き公文書不適とは寒し
はぜ紅葉執着曼陀羅薄れけり

北
限
秋
愁

江
草
礼

水平線のサハリン淡し鳥渡る
浜言葉とびかふ漁場野分あと
雲丹刺しの舟沈むほど傾けて秋
熊啄木鳥や衰亡の民文字持たず
甘海老の子持ちぎつしり紅葉酒
鰯雲水を増やして礼文滝
かりがね寒沼上三尺日を残し
初鮭や遡上一途の鱈力
稜線の鬣となる花芒
秋落暉宗谷岬のしじら波

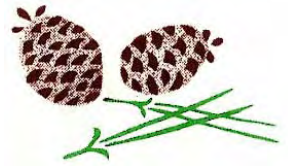
今年米

見田英子

雀まだ群れをたのしむ刈田かな
通草甘し五風十雨を授かりて
茸山に入りて髪膚の湿りかな
さみしらに猫にもの言ふ夜寒かな
強霜や亀重なりて石となる
返り咲く梅の香神の手すさびか
黒鯛^{ちぬ}の鱗添へて届きぬ今年米
困を張りしまま女郎蜘蛛凍ててをり
封切りの輸入ワインや憂国忌
冬至柚子母へ供へてからのこと

当月集

鈴木 榮子選



○ 廖 運藩

舶来の孫の花嫁雁来紅

立女形眉に霜置く村祭

凄まじき音痴の放歌月見酒

満月や五代同堂の四合院

月を待つ血縁細き老ゲリラ

○ 荻野嘉代子

中国事情漫画に辿る秋灯下

「ハーメルンの笛吹き男」読む白露（悼）

生きんとや会式太鼓の熱かりし

紅葉かつ散る伴大納言絵巻

逢瀬得し湖国の仏小六月

○ 佐々木 新

山を背の大内宿や蕎麦の花

色変へぬ里曲さどみの松や火の見旧る

読み返す功名が辻秋闌くる

敗荷や吾が影千々に池の面

白樺の林に月の蒼きかな

○ 陳 錫恭

おちいさん列車まかるや明治草

夜長し古き書に百元札出でて

射的場の与一に吹きまし秋の風

ろうととの席譲り合ふ菊花宴

紙カップで飲むコーヒーや鳥渡る

○ 横田初美

ひよどりや熱の子の眼に捕はれて

子に林檎りぼん解くごと剝きにけり

点滴の音なき音の夜長かな

山茶花の窓を拭ひし指の冷

退院の子に喜びの木の実降る

春燈の句

鈴木 榮子選

三重 上野 進

身の先をこころ駈けゆく穴惑
鮎残し水の逃げ行く下り鰻
蛤となる雀かも舫船

勤行の鐘に討たれて紅葉散る
美術展野草展観てひとりかな

子規忌かな松山に肉食ひ放題
神籠の紅葉眺むや石の椅子

菊の香や遙かとなりし明治節
吉祥天漢の秋思なにほどぞ

池越しの阿弥陀を拝す秋明菊
鯉呼んで浄瑠璃寺の秋盛ん

坐して拝す九体仏や木の実降る
賄高音白のポストにタイムス紙(武相荘)

秋澄むや書齋に伏せし明月記
色鳥来無造作に置く「ヴォーグ」かな

ジーンズの似合ふ野人や芋風
小鳥来る右手になじめる花鋏

福島 生方 義紹

お三時の母からもらふふかし諸
秋天の飛行船旧りしモダニズム
きやうだいの往キ来キ勘シ青蜜柑

霧の街歩きし髪シの湿りかな
秋夕バ美しい時生まれけり

山茶花や生まれし家を見て帰る
立冬の風をさまりし夕べかな

中吊り広告満載の秋揺らしをり
電卓の数字変はるや夷切れ

秋夕日積んで傾げり舫ひ舟
紅葉かつ散る鯉の背華やげり

四肢張つて荷台の仔牛秋の空
吉報のふはりと着地鷹渡る

手話の子の値段交渉秋澄めり
鷹柱解けてけふの時かな

山あひの刈田は子らの運動場
運動会とりは全校傘踊り

ありし日の父の笑顔やむかご飯
湯の町に松葉がに売るぼてふり女

山裾に赤き鳥居や雁来紅
身に入むや嘘を上手にいつはりて

茨城 君塚 敦二

東京 後藤真由美

沖繩 辻 泰子

兵庫 尾崎 貞

台北 林 雪江

余言

鈴木 榮子

新米の花蓮に出来る越ひかり

陳 妹蓉

花蓮は台湾の地名である。農業が出来る所なのであろう。その生産米に「越ひかり」という名がついているのだ。日本でも越後の越をとって「越ひかり」だったが福島の「越ひかり」など色々な越ひかりがある。そうであれば花蓮の越ひかりもあつてよい訳で、むしろ花蓮ひかりには出来ないのだ。ブランドというもの一旦流通してしまふと勢いが付きとめどなく行き渡ることをよく感じた。

残る蠅動物園に暮しけり

佐渡谷秀一

残る蠅は、冬になつてもどこからともなくきて、その存在をみせる。その蠅がどこに居るかと思つたら動物園に暮していたのだ、というまことに愉快な句である。

特に動物園が住み家であるというのではない。

蠅にしてみれば広々として、蠅の好みに合いそうな臭いを持つ、集団の居場所となれば動物園が如何にも打って付けの住みかである。蠅もさる者。

行く秋や晩学の灯の斯文会

渡邊 泰子

東京吟行会で、湯島聖堂、ニコライ堂、及び神田明神にいった。お陰で湯島聖堂も神田明神も行く機会を得た。

湯島聖堂は徳川綱吉が作つた幕府の学問所である。今も斯文会が論語の学問道義、斯道特に儒家の道を伝えんとその講義が続けられている。

邯鄲や死にゆくときは選はれず

秋山 薫

邯鄲は本来中国河北省南部の都市の名である。人口百二十万の都の名である。季語としては昆虫で使われるときは虫の一種となる。夏秋の草の間にすみ美声で鳴く。

その儚なげな鳴き声が人の心を引いて季語として用いられたいと思う。

中七、下五は万人共通のことで致し難いことである。

明日を知らない我が身であるが、我々はそう意識して毎日暮している訳ではない。毎日を自然体で自らの志を静かに生かしてゆきたい。何も彼も己れ独りの人生である。